

今回の国立大学博物館等協議会ならびに博物学会への参加は、田中資料館館長が所要で出席できないので「代理」として参加していただけませんかのご依頼があり、のんきに引き受けたのが間違いでした。よく、考えれば博物館に関してはほとんど素人で、資料館委員の仕事も満足にこなしているとはいえない私に引き受ける資格がなかったと気がついたときには、既に旅行の計画は決まっております、同行して下さる資料館職員の堀井美里さんを頼みの綱として出発することになった次第です。

6月22日空路、札幌新千歳空港にお昼前に無事到着しました。観光シーズンとあって機内はほぼ満席(?)でした。ただし、梅雨のないはずの北海道ですが、曇りから雨が降ったりやんだりの天候で、結局、札幌を離れた24日にやっと天候が回復しました。しかし、これから報告しますように、今回の協議会では、天候はほとんど関係がありませんでした。

昼食もそこそこに、会場の北海道大学の学術交流会館に向かいました。会議には28の博物館等から、70名を越える参加者と、博物科学会のみ出席の12名の特別参加者ならびにその他の参加者があり、大きなホールも狭く感じるくらいでした。前回の国立大学博物館等協議会は、岩手大学で開催され、そこで今回の学会形式の発表会が提案されました。そのため、今回の協議会では、「第1回博物科学会」も同時に開催されました。私自身は初めての出席でしたが、予想以上に盛況で充実した会合でした。以下、私なりに会議と学会の報告をさせていただきます。

会議は、午後2時30分から開始され、初めに北海道大学の中村総長の挨拶があり、北海道大学が全学的にいかにも博物館に力をいれてこられたかが

自然科学研究科(理学部地球学科) 奥野正幸

わかりました。その後、博物館等協議会会長の藤田北海道大学博物館館長が、「博物科学会へようこそ!」と題し、その中で協議会の使命とともに、博物標本を使ったサイエンス MuseScience (博物科学) の出発とその重要性についてのお話がありました。

つづいて、第1回の「博物科学会」の講演に移り、ミュージアムマネジメント学会の沖吉副会長の基調講演で本格的な発表・討論が開始されました。発表は、6月22日から、23日にかけて、「情報」、「学術」、「展示」、「教育/マネジメント」、「地域・社会貢献」の分科会の計25件の発表が行われ、会場が一つということもあり参加者はほぼ缶詰状態で、最後の東京大学博物館館長の林先生の特別講演まで、多くの参加者の活発な発表と質問が続けられました。正直なところ、このように長時間ほぼ全ての発表を、ちゃんと(いねむりをしないで)聞くのは久しぶりで、さすがに終盤には、私は疲れてきましたが、堀井さんは終始、メモを取りながら熱心に聴かれていて、反省させられました。

最初の「情報分科会」では、博物館の生命線である、学術標本の集積・保存・公開・利用など様々



—会場の学術交流会館—

な場面での「情報化」についての発表があり、バーチャル標本の最新の作成技術、データベースシステムの様々な工夫など、標本についての情報の整理と保存は当然で、その先の情報公開や利活用環境といった先端的な博物館の情報への取組みが紹介され、博物館の使命が新たな段階を迎えようとしていることを強く感じました。

「学術分科会」では、広島大学医学資料館のユニークな「木骨（木製人体骨格模型）」の紹介があり、江戸時代の医学研究・教育に利用され、その製作に携わられた多くの細工師の技術の高さに驚かされました。また、北海道大学に在籍された植物分類学者“秋山 茂雄”の図版「極東亜産スゲ属植物」に対応する標本の検索とデータベース作成の発表では、氏が1965年から1971年にかけて金沢大学理学部に教授として在籍していたことを初めて知らされました。ここでは、博物館の基点が標本や資料の収集であり、いかに労力がかかりたいへんかということを感じ知らされました。

「展示分科会」では、鹿児島大学の「学ぶプロセスとしての展示」と題する発表が非常に印象的でした。大きな展示施設を持たない博物館としての「トラベリングミュージアム」の提案では、場内から拍手がおこったが、それ以上に、展示会の開催までのプロセスを学生などの「学びの場」としてとらえる活動については非常な驚きでした。従来まで、多くの博物館で行われている、参加者の「学びの場」はもちろんのことそれを「超えた」取組みは、「博物館実習」くらいしか考えもつかなかった筆者には衝撃でした。これについては、様々な意見があるかと思われそうですが一つのチャレンジ精神に満ちた取組みといえるでしょう。

「教育／マネジメント分科会」及び「地域・社会貢献分科会」では、博物館は、まず展示施設からという従来の考え方からの脱却と教育及び地域・社会貢献への取組みについての発表が相次で行わ



—北海道大学総合博物館—

れました。基幹となる大きな展示・収蔵スペースを持たない大学博物館では、これらの施設の設置に努力されるとともに、大学内のさまざまな施設や学外の施設を利用する取組みがなされていました。例えば、今年度発足した島根大学ミュージアムは、一ヶ所にまとまった展示スペースや収蔵スペースを確保することができないため、「島大まるごと博物館」というコンセプトのもとで、旧埋蔵文化財調査研究センターを「ミュージアム本館」とし、汽水域研究センター山陰地域・汽水域資料展示室、古代出雲文化資料調査室、附属図書館、ミニ学術植物園など、各部局の既存の展示収蔵施設をネットワーク化して利用するほか、キャンパス周辺の近世の佇まいを残す松江城下町、古墳群、ラムサール条約指定の宍道湖などを有する地域と連携した博物館の実現を目指していました。また、地域と連携した子供教室などの教育活動は、上記のような大きな施設を持たない博物館の活動の重要な部分をなすものであり、多くの大学で多彩な試みがなされていました。これらの分科会の発表で、もう一つ強い印象を受けたものは、名古屋大学博物館と名古屋市博物館で共同開催した「地球教室」の取組みの中で、現在大きな問題となっている“子供の自然（理科）離れ”は、実は子供たちの問題でなく、実は子供たちに自然を教えられ

ない大人の責任であるという、発表者の指摘でした。筆者自身も理学部での同様の活動の中で同じように考えていたこともあり、大声で「そのとおり！」といたい気持ちでした。

以上、今回の発表を通じて、改めて博物館とその幅広い活動の重要性が理解できたような気がします。大学にある貴重で膨大な資料を「死蔵」させることなく、「整理」、「公開」、「利用」することが大学博物館の大きな使命ではありますが、大学博物館のもっと大きな特徴は、「資料・標本」だけでなく、それを支えている大勢の研究者とその研究こそが貴重な「資料」であることでしょう、それを利用した博物館活動は、一般の博物館と比較したとき、大学博物館の最大のメリットであり強みであることを改めて認識しました。

さて、このように「第1回博物館学会」は、成功裏に終了し、その後、館長会議・実務者会議、協議会総会が開催されました。これらの会議では、会員の名称変更（島根大学ミュージアム、広島大学総合博物館）及び、国立民族学博物館と香川大学博物館の新規加入が認められた他、国立大学が法人化されたことを受け、協議会の名称変更が協議され、名称を「博物館等協議会」とする方向で調整することが了承され、本協議会が新しい段階に向かうことになりました。さらに、来年度の協



—構内の「人口雪誕生の地」碑—
世界で初めて人口雪の製作に成功した北大教授
中谷宇吉郎は、石川県・四高出身。

議会は九州大学で開催し、「博物館学会」も当面この名称で、協議会と同時に開催することを決定し、2日間に亘った国立大学博物館協議会ならびに第1回博物館学会はすべて無事終了しました。

ところが、筆者と堀井さんには、もう一つ大きな仕事が残されていました。実は、せっかく、札幌まで足を運んだのに、学会と協議会にまじめに(?)参加した結果、肝心の北海道大学総合博物館はもちろん、構内のポプラ並木も見学していませんでした。最終日にやっと博物館の見学をすることができました。北海道大学総合博物館は、正門から歩いて約5分、札幌駅からでも10分という非常に便利な場所にあり、最近では、定期観光バスのルートにも入り、昨年度の入館者は約7万人にも達したとのことで、たいへんうらやましい限りでした。建物は、旧理学部本館の3階建ての建物を改修したもので、外観は歴史を感じさせるレンガ造りでその中の約1,500㎡が展示スペースにあてられ、収蔵室・研究室を含めると6,500㎡もあります。1階入ってすぐの、北大の歴史に関する展示では、北大創立以来の歴史と現在の状況をつぶさに見ることが出来ます。ここには、石川県ゆかりの中谷宇吉郎先生の雪の結晶に関する実験装置も展示されていました。学術テーマ展示、学術資料展示は、総合博物館が持つ400万点近くの標本が持つ力が発揮されていました。さらに、今後300万点の標本が総合博物館に移管される予定だということで、益々展示が充実してゆくことでしょう。このような、総合博物館の展示を全てをゆっくり見学する時間もなく、帰りの飛行機の出発時刻がせまり、仕方なく博物館を後にしました。

考えれば、札幌に着いてから2日間、大学博物館活動の大きな波に翻弄されつつも充実した「協議会」と「博物館学会」でした。最後に、この会議をご準備いただいた北大の皆様にご挨拶申し上げて、わたしの会議の報告とさせていただきます。